

北の縄文文化回廊
に向けたクラブ活動



通 信

第 19 号



シーニック d e ナイト雪像

目 次

1. はじめに	2
2. 平成28年度活動一覧	2
3. 各活動内容	3
4. 関連活動	6～8

1. はじめに

平成28年度の活動は、会員の皆様のご協力のもと無事終了することができました。私たちは、縄文遺跡群の世界遺産登録を願い、活動してまいりました。北海道新幹線開通からはや1年がたちました。本州との距離が一段と近くなり、三内丸山遺跡や小牧野遺跡へ研修にも行ってきました。これからも、交流の場が増えることを願っています。4月には、大船遺跡内やシーニックバイウエイ北海道 函館・大沼・噴火湾ルートへの取り組みに関連した清掃活動や植栽に参加しました。また、土器作りや野焼き・魚形石器づくりをしました。今後も、他団体や関係機関と協力連携しながら世界遺産登録を目指し活動していきたいと思っています。

これからも、さらなる縄文文化の普及活動を行っていきます。以下、平成28年度の活動内容を報告します。

2. 平成28年度 活動一覧

活動日	主な活動	参加人数	活動場所
4月16日	清掃活動	7名	史跡大船遺跡
4月24日	第19回「北の縄文CLUB」総会	13名	南茅部総合センター
6月25日	魚形石器づくり	8名	史跡大船遺跡展示館
8月27日	縄文土器づくり	5名	南茅部総合センター
10月8日	縄文土器野焼き	14名	史跡大船遺跡体験広場
10月22日	研修会(青森)	8名	青森県
2月5日	シーニックdeナイト	20名	縄文文化交流センター

(関連活動)

4月29日	シーニックバイウエイ北海道 函館・大沼・噴火湾ルート 清掃活動・植栽	縄文文化交流センター
5月25日	シーニック総会出席	南茅部総合センター
6月4日	南かやべひろめ舟祭り 体験コーナー	白尻漁港
7月8日	南かやべ縄文祭り会議出席	南茅部支所
9月23日	野焼き用薪整理、レンづくり	函館市
10月1日	第1回南かやべ縄文祭り	縄文文化交流センター
11月3日	南茅部地域文化祭出展及び勾玉づくり体験	南茅部総合センター
11月27日	事務局会議	鹿部町
11月15日	噴火湾考古学研究会 20周年記念講演会出席	伊達市
11月27日	三内丸山応援隊 20周年記念式典出席	青森市
12月25日	NHK撮影協力	伊達市
3月11日	事務局会議	白尻町

3. 活動内容

(1) 清掃活動

4月16日(土)、午前9時半、史跡大船遺跡に集まり、私達と函館市教育委員会の方々のお手伝いもしていただき、遺跡内の清掃と史跡大船遺跡へ行くのぼりの坂道の壁面の清掃を行いました。苔の付いた壁面をブラシで、ごしごし力のいる作業でした。見違えるようにきれいになりました。ご苦労様でした。



水運びに苦労します



力がはいります



きれいになりました

(2) 第18回総会

4月24日(土)、午前10時、函館市川汲町にある南茅部総合センターを会場として、第19回総会が行なわれました。

総会では、平成28年度の活動や決算についての報告がおこなわれ、出席者のみなさんに承認していただきました。続いて新年度の活動計画案や予算案についても、沢山の意見が出ましたが承認していただきました。今後、会員数が減っていく中、どうにか増やしていかなければと、事務局会員が努力していこうと決意しました。

(3) 魚形石器づくり

6月25日(土)、史跡大船遺跡展示館において、魚形石器づくりを行いました。魚形石器は、海の魚を獲るために使用された漁具と推定されています。おもに北海道の石狩地方から道南地方一帯で出土しており、両端が尖って中央がふくらんだサツマイモや魚のような形をしています。端には、糸を結べるようにくびれがつけられているものがあり、ふくらんだ部分の端寄りのところにも一周

するように刻み目が入れています。長さは20cm前後で、小さいものは8cmくらいのももあります。材料は加工がしやすく、ある程度の重さがある石材が使われます。砂や泥が堆積して固まった泥岩が高い圧力をうけてかたくなった「頁岩」、頁岩がさらに高い圧力を受けた「粘板岩」などです。魚形石器は、現代のルアーに似たようなものではないでしょうか。

ふと昔、私の父が使っていたのを思い出しました。舟に乗って沖へ出て、「てんてん」という技法で魚を釣っていました。それも手作りで、確か鉛を溶かして型に流して作っていたのをおぼえています。縄文時代から、現代に至って作り方や材料は違うものの、漁法は似ていたのではないのでしょうか。

(4) 土器づくり

8月27日(土)、川汲町にある南茅部総合センターにて、土器づくりを行いました。今年はテーマをもうけず、縄文時代全般の土器をつくることにしました。皆さん、自分の好きなように作っていました。

(5) 土器野焼き

10月8日(土)、史跡大船遺跡体験広場に8時半に集まり、水汲みや土器の運搬をして、レーンのそばに薪を運ぶなど、下焼きの準備から始まりました。レーンの中に薪を積んで点火します。火が盛んに燃え上がり、火力を維持しながら2時間ほど燃やし続けました。一旦火を弱めてから、レーンの周りに土器を置いていきます。そして、じっくり時間をかけ少しずつ回していきます。底の部分の水分も飛ばすため横にします。徐々に土器をおきの中に入れていきます。



いよいよ本焼きにとりかかります。薪を入れて一気に燃やすと、凄まじい炎のため、そばに寄っていくことができないくらいの熱気です。メンバーはタオルで口や顔を覆い、薪を絶やさず足していました。その合間に昼食の準備をします。そして、昼食後に作業開始。やがて、火力も落ち着き、土器の取り出しです。水に入れて急冷すると表面が赤くなりました。叩くと澄んだ音色で出来も上々、参加された皆さんも満足された様子でした。

(6) 研修会 (青森へ)

10月22日、待ちに待った青森への研修会です。北海道から新幹線に乗り約1時間で到着しました。事務局員の手配でタクシーに乗り、小牧野遺跡へ向かいます。遺跡見学の前に立ち寄った、縄文の学び舎・小牧野館は、平成24年に閉校になった小学校を改修し、遺跡の出土品等の展示や保管、情報発信をおこなっているところです。

到着後出迎えていただいた、教育委員会の担当の方々に施設の中を案内していただきました。子供達楽しんで体験できるコーナーなどもあり、見ごたえがあって、とても感動しました。ストーンサークルは丘の上にあり、晴れた日には北海道の松前も見え、夜には車のライトも見えるという絶景のスポットと教えていただきました。遺跡内には、ストーンサークルの他にもお墓もあり、周りにはクリやドングリの木が生え、クマも出没するそうです。ちょうど見学に行った日に、マスコットキャラクターの名前が決まり、表彰式があって、「コマックウ」という可愛らしいクマでした。午後には三内丸山遺跡時遊館にて、アカネという植物の根の部分を使ってハンカチを染める体験をしました。アカネを採取するのは大変で、500gを集めるのに3年かかったそうです。ですから、私たちは貴重な体験をさせていただいたということで、昼食もごちそうになりました。ポシエット作りも教えていただき、楽しい時間はあっという間でした。別れを惜しみつつ、駅に向かいました。新幹線に乗ったと思ったら、もう新函館・北斗駅に到着です。そこで各自解散となりました。とても楽しい1日でした。また、皆で行きたいですね。 (大宮)



(7) シーニックdeナイト2013 (シーニックバイウエイ北海道函館・大沼・噴火湾ルート)

平成29年2月5日(日)、函館市縄文文化交流センター周辺にて、シーニックdeナイトが開催されました。今年は雪がありました。北の縄文CLUB自慢の国宝中空土偶の雪像を作ることになり、でっかいカックウの雪像が完成しました。キャンドルライトも幻想的でした。

(4) 関連活動

(1) ひろめ舟祭り

6月4日(土) ひろめ舟祭りが行われました。天気に恵まれ、会場も賑わい、体験コーナーも好評でとてもよかったです。メインの船漕ぎ競争や夜の漁火パレードはとてもきれいで感激しました。



勇壮な船がお披露目



体験コーナーは大好評



勾玉づくりに挑戦



女の子も火おこしに挑戦

(2) 商工会縄文祭り

9月27日(日)、函館市縄文文化交流センター広場前にて、第3回目の「商工会縄文祭り」が開催されました。広場では南茅部高等学校書道部によるパフォーマンスや安浦駒踊り等、北の縄文CLUBでは火起こしや弓矢的当てなど、子供ばかりではなく、大人の人達にもとても好評でした。

他にも縄文服を着てみたり、いつしか縄文ロマンに想いを馳せていました。



縄文人になりきっています

(3) レヴィ＝ストロースと「縄文の精神」

世界的に著名な人類学者のレヴィ＝ストロースさんは、日本の文化をこよなく愛してやまなかったことでも有名でした。特に縄文土器との出会いには衝撃を受けられたようで、日本での講演会の言葉は印象的です。(1988(昭和63), 3, 9、京都の国際日本文化研究センターでの公開講演会・『中央公論』5月号に邦文で掲載)氏は、2009年に100歳で亡くなられています。ご健在であれば「北海道・北東北の縄文遺跡群」の世界遺産登録に向けた活動に大いに力になっていただけたのではないかと思います。弟子の人類学者である川田順造さんの訳文でご紹介します。

「狩猟・漁猟や採集を営み、農耕は行わない定住民で、土器づくりの名手として知られる人たちが生んだ日本の一文明は、私達に独創性の一例を示してくれます。人類諸文化のすべてを見ても、これに比肩できるものはありません。なぜなら、縄文の土器が、他の土器にも似ていないからです。まず、その年代ですが、これほど古く遡ることのできる土器づくりの技術は、他に知られていません。次に一万年も続いたという、長い期間もそうです。そしてとりわけ様式が独創的なのです。その様式は、縄文中期の「火炎様式」とでも呼ぶべき土器において、見る者の心をとらえずにおかない表現に到達しています。これを他と比較する言葉などありません。それであまりにも突飛な形容をしてしまうのです。「構成がしばしば比対称」とか「あたりかまわぬフォルム」とか「ぎざぎざ、突起、瘤、渦巻き、植物的な曲線がからみあう造形装飾」といった表現をきくと、五、六千年前に、「アール・ヌーボー」が生まれていたような気持ちになります。(中略)

いずれにせよ、私がしばしば自問することは、弥生文化によってもたらされた大変動にもかかわらず「縄文精神」と呼べるかもしれないものが、現代の日本にも存続していないだろうかということです。もしかすると、日本の美意識の変わることのない特徴は、この縄文精神なのかもしれません。日本の美意識の特徴は、素早く、確かな創作を実行することであり、これには、二つのことが

必要です。一つは技術をこの上なく見事に操ること、もう一つは仕上げる作品を前にして長い時間考えることです。この二つの条件は、靈感をえた縄文土器の名人たちも、おそらく有していたと思われるのです。そして、様式上の同じ原則が、遙かな時をこえて、変化した形で残っているのではないのでしょうか。（中略）

さらに驚かされるのは、科学と技術の前衛に位置するこの革新的な国が、梅原猛氏がいみじくも強調したように、古びた過去に根を下ろしたアニミズム的思考に、畏敬を抱き続けていることです。神道の信仰や儀礼が、あらゆる俳他の発想を拒む世界像を有していることを知れば、これも驚くにあたらないでしょう。宇宙のあらゆる存在に靈性を認める神道の世界像は、自然と超自然、人間の世界と動物や植物の世界、さらには物質と生命を結び合わせるのです。（「世界における日本文化の位置」『月の裏側—日本文化への視覚』クロード・レヴィ＝ストロース著・川田順造 訳・2014年7月中央公論社 刊）

北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録され、世界中の人々が、日本文化の基層にある縄文文化に接し、愛してくださることを切に望みます。 櫻井

（4）遺跡発掘現場に鹿の親子（電電公社合宿舎遺跡）



6月26日、午後1時過ぎ、ひょっこり、鹿の親子連れが私たちのすぐ目の前に現れたのです。びっくりしながらも、すぐにカメラのシャッターをきりました。鹿はこちらを見て、私達も鹿のほうを見つめていました。時間的に5分ぐらいだったような気がしました。それから、時々姿を見せるようになりました。

2019年10月31日 第19号発行
発行 北の縄文CLUB
連絡先 北海道函館市白尻町 603-1
一般財団法人
道南歴史文化振興財団内
TEL 0138-25-5510
FAX 0138-25-5606